Sketch of 県立薙久篭高等学校

しづやりふかふ

薙久篭（なぎくさ）という地名は草薙（くさなぎ）の剣の前に屈した民族の自暴自棄な自虐的諧謔、或る意味では反骨の精神ということらしいが公式には恭順の意を表わしたものということになっている。

そういう訳で、県立薙久篭高等学校の創立にあたっては、設立検討委員会が聴聞したところ、敢えて草薙高等学校にしようという意見が地元から湧き上がったらしいが、さようないわく因縁のある胡散臭い名称を役所が採択するはずもなく、明治３４年、鎮護国家に資する人となることを校訓に（これもアイロニーか）、戦時下の一時閉校を経て今日も創立時より高く聳える門を威風堂々天に衝き上げているのであった。校旗は眞神の徽を刺繍し、ファサードの屋上に誇らしげに翻っている。

閉校の理由は叛逆罪の可能性であった。民族の自立への道は、…だが、昔のことはもうどうでもよい。

左右に翼を持つ鉄製のアーチを冠したこの正門は敢えて蛇紋岩で造られていた。敢えてというのは、その岩は谷川岳などによく見られるものだが、風化作用を受けやすく、もろく崩れやすいので、通常は採用されるはずのないものであるからだ。そこには（はっきりとは分からないが）下天一日五十年と刻まれている。むろん公立学校で県がそのような仕様を採るはずも、発注するはずもない。

保護者会や同窓会がやったことであった。

眞神郡（眞神村、畝邨（ほむら）村、龍呑（りゅうどん）村、龜鹽（かめしお）村）とその周辺（薙久篭町、赤門戸（あかかど）町）の住民は自らを眞神斗人と古来言い慣わす。大和朝廷と斗（たたか）った人という意味だ。彼らにその矜持がある。

門扉は開閉式の鉄柵で高さは3メートルもあった。鉄のアーチは柵と同じ鉄製の〝槍〟をアラベスク（もしくはケルトの文様）風に神秘で美しい曲線にして絡め、門扉中央の上さらに2メートルの位置から4メートルの頂上（つまり幅2メートルの帯状の半円をなしている）に尖を持ち、衝天している。すなわち総計で7メートルという、2階建ての棟のあたりまで至る高さだ。

正門は南にあるので、南門とも呼ばれた。門を通ると、真正面は円形の芝地で、半径166.5メートル。

円の真央に壮麗なる五重の噴水台が見える。噴き上げる水はあたかも五重塔の尖端に伸びる相輪のようであった。

芝地の周囲を廻る列柱廊が左右に弧を描きながら廻っている。歩行者はコリント様式の円柱に支えられたその屋根の下を、車輛は列柱廊の外（円周内側）を行くようになっていた。

さように、列柱廊の左右いずれかを進むと、東門又は西門から伸びて来て、俯瞰すると、拾文字をなすような東西路により、列柱廊の円環は左右から貫かれる。東西路は噴水のある円の中央で相通ずる。

また、東西路は列柱廊の外環を廻っている車道とぶつかるときは、傾斜の緩やかな、優雅な欄干附きのアールヌーボー調

の陸橋となって、跨ぐ。

さて、歩行者は東門から来た者ならば、円環を右廻りして来た者たちと合流して、西門から来た者ならば円環を左廻りして来た者たちと合流して、円環の残り半分を周廻をすることとなる。

終に左廻り右廻りのぶつかるところ（円環の帰結点）へ来ると、登校する生徒や来校する賓客は再び右折又は左折して、校舎へと真っ直ぐ向かう南北路を行くようになっていた。街路樹の老大木が繁り、ベンチの置かれた蓮池が東西にある。

自動車道も同様で、左右を歩道に挟まれながら南北を往く道となって、そのまま進むと、正面玄関前でロータリーに入り、公用車・社用車などは賓客を下ろし、校舎に沿って右に抜ける路から駐車場へ入るようになっていた。

さて、徒歩の者は池を観ながら円柱がならぶ玄関に至ることとなる。見上げる厳粛なファサード。行かんとすれば、目の前にあるは、玄関の幅に合わせた、広くて白い石段。しかし生徒はそこを上らず、玄関の左にある大昇降口から入り、下駄箱のならぶそこで上履きに換える。

ちなみに玄関と昇降口の間に、細い守衛室があり、玄関と昇降口の双方に面するガラス窓があって、警備会社から派遣された警備員が常駐していた。

なお、玄関右側は職員玄関で、上がって右に行くと、順に事務室、校長室、及び職員室がある。

建物は両脇に塔を持った大聖堂のようなファサードの管理棟を中央に、左右に3階建ての翼を伸ばし、左翼が普通教室棟21室で、右翼が特別教室棟となっていて、実験室や実技室、芸術科の教室、視聴覚室や講義室などになっている。そして左右翼の端にもやはり尖塔がある。

左右翼を持つこの棟の後に渡り廊下で繋がった生徒棟があった。生徒会関係各室や文化系部室やセミナー室・研究室がある。

校舎は彫刻装飾のふんだんに盛られた、非常に凝った外観の洋風建築であったが、すべては寄附で賄われた。

古来富裕の地と謂われた眞神郡に隣接するこの薙久簗町も、元は眞神の一族の領土であり、薙久簗は眞神の前庭（ちなみに赤門戸町が城門）と言われるように、同じく資本の蓄積があり、逝にしへから財貨を継いでいたので、この程度はお安い御用と言わんばかり、建設にあたっては、地元有志からたちまち数百万円（むろん当時の額面で、だ。国庫補助の廃止という背景もあった）が集まったと謂う。

県の公費を使わずに建ったとも謂われていた。大和からは金はもらわん、といったところか。

このときの設立経験は、当時まだ私塾であった眞神眞正義塾が私立学校（旧制中等教育・旧制高等教育・大学）へ移行するにあたっての重要なスキルとなった。

教室の窓側から外を眺めていると、大きな盤が三段になった噴水台がよく見える。

特別教室棟の右翼の裏には講堂があり、左翼の裏には体育館があった。それぞれ屋根附きの渡り廊下で結ばれた3階建てで、講堂はエントランスに入ると、オペラ・ガルニエのような階段があり、各階に大きな扉がある。扉の向こうは1階席2階席3階席で、吹き抜けの円天井、まさに劇場のようであった。体育館の方は1階が簡易合宿所及び体育科教員室、2階が

柔道場・剣道場・トレーニングルームで、3階がギャラリー附きのアリーナである。

さらにその奥には清明寮と呼ばれる宿泊のできる三階建てのセミナーハウスがあり、バロック様式の洋館の風を呈していた。

校庭はさらにその奥に、長い長方形に広がっていた。４００ｍトラックに陸上競技場、サッカー場、野球場、庭球場、弓道場、ハンドボール場、及び菜園、自然観察園となっている。

前庭が柱廊による円形を成していたので、上空から見るとあたかも前方後円の逆、前円後方形のようであった。

そこもこだわりか。

県立校ですらこれほどイジってしまう眞神の民である。眞神の精神の中枢たる私立眞神高等学校がどれほどのものか想像がつくであろう。

補遺：

眞神高とは言っても、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、学寮制大学（大学院含む）までが広大な敷地に展開する、いわば総合的な学園であった。

その歴史は渡来以前を含めれば、創立８千年にも及び、世界最古であること間違いない。

いにしへより、真理の殿堂と崇敬されながらも、２１世紀になるまでは学校法人の許可が取れず、大学は前世紀までは、眞神義塾という名称であったが、それでも過去から現在まで、眞神郡及び周辺市の子弟が集まり、人口の少ない田舎ではあっても（人口は少ないが、少子化していないせいもあり）、常時、幼稚園６０名、小学校３６０名、中学校１８０名、高校生１８０名、大学生１２００名以上が在籍する。眞神神社に次いで、眞神学及び眞神精神の中枢であった。

正門は南面して7つの門があり、一番大きな中央の大門をくぐると、神の道とされる幅１２０ｍの神路へつながるっている。大門を中心として左右それぞれに三つずつある門が中門で、左右とも神路に近い方から学路、一般路、自動車路（路幅はそれぞれ２５ｍ）となっていた。

大門も中門もアーチ形の透かし彫りを飾り、各々が左右に尖塔をもっている。塔には人が上れた。

門を入ると、木々に囲まれ、東西に高さ５０ｍの五重塔が立ち、東塔・西塔と呼ばれている。東塔を北進すると、幼稚園、小学校、中学校、高等学校がならび、西塔を北進すると大図書館、大劇場、大競技場、龍飲清水池のある公園がならんでいた。

神路をそのまゝ真っ直ぐ北へ２㎞逝くと、世界最大の木造建築である大真義堂があり、その行動を廻ると広大な学寮の敷地が連なる。それはなだらかな山の斜面を登り、標高１００ｍの学寮山の頂上に建つ天下睥睨烽火堂を越え、鬱蒼たる麓に着くと、北面する繁文縟礼な太極門にたどり着くのであった。南から北まで１６㎞である。

全体として曼荼羅をなし、北に山、東に河、南に湖畔、西に街道があり、四神相応の土地であった。従がって大真義堂は龍穴をなしている。しかもさらに北には眞神山と眞神神社があった。眞神は地域全体でもまた龍脈を考慮した大曼荼羅を描くのである。

さて、眞神義塾はこれほどの敷地を２０００名未満の幼児児童生徒学生らと教職員ら３０００名超で使用しているのであった。

授業料等の月々の支払は幼稚園で１０万、小学校で２０万、中学校３０万、高等学校４０万、大学は１００万円からである。

真理は金には代えられない。

朝、登校中の高校生が議論していた。

「救いがないとはふつう絶望を言うが、捉えようによっては、問題が何もない状態を指すとも言えまいか」

「なるほど、絶望がなければ救いようがない」

「そうさ、既にすべては解決している、と」

しかし別の一人が首をひねった。

「なら生きる意味はない。生きることは希うことで、今と違った状況を欲することだからだ。違うか？」

笑いながら手を振り、

「いやいや、そうでもないだろ。

満たされないことを、現実として肯定する、って状況を想像してみろよ。更に辛いであろう、受け容れ難い、ということを現実として肯定する、としてもよい。

満たされない、受け容れ難い、ということを現実として、それそのまゝに受け留めて、満たされない、受け容れ難い、という拒否のまゝに拒否する。

すなわち、あるがまゝに肯定する」

「だが、それはもはや肯定じゃないだろ」

「そうさ。これぞ『龍肯』、龍のごとき肯んじ、ってやつだろ。人間のスケールでは、もはや計れない」

「ただ、存在する、存在ということだ。存在だ」

「公理どおりだな。

「あゝ、あれか、『真の無は存在である』ってね」

「懐かしいな」

「つまり、何をやっても同じなんだ。
何もやる必要がない。もう解決している。だが、それはやらなくてよい、という意味ですらない。
努力してもいいし、しなくてもいい。それなりの結果になるだけだ。あるがままにあるだけだ。
すべてが既に究竟に到達している。すべてが最善。最悪も最悪のまゝで最善。だから生の終わりではない」
「腑に落ちたね。
だから死に瀕して水を欲したのか。
覚っても、不安はそのまま不安でなければならない。不安を不安のまゝ不安がることがそれを受諾しったってことだろ」。
「だよな。仏陀が正しい。
不死なる者は死を恐れるから、不死であり続けている。死を怖れるから、不死であろうとする。
死への怖れから解脱していない」
「哲学のテストに出るな」
「自明だ」

（自著『釈迦牟尼』より抜粋）

「喉が渇いた。水が飲みたい」
路傍の樹下に斃れ、喉の渇きをアーナンダに訴えた。
マッラ国(末羅国)の鍛冶工の子チュンダのマンゴウ林で食事の供養を受け、スーカラ・マッダヴァを食べた後、痢病を発し、八十歳の肉体は激しい苦痛に襲われていたのだ。
ヒラニャヴァティー河を渉り、クシナーラーのウパヴァッタナの双つのサーラ樹(沙羅雙樹)の間に痩せ衰えて乾涸びた体にて横臥し、死す。